

Title	アダム・ スミスと社会主義者：東京大学におけるアダム・ スミスの会発会式講演速記
Sub Title	Adam Smith and socialists
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.1 (1951. 1) ,p.1- 24
JaLC DOI	10.14991/001.19510101-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19510101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

有斐閣

近代經濟學の展開(選書)

東京都千代田區神田保町二
本郷支店 振替東京三三〇番
京都支店 農學部電停前
中山伊知郎 三〇〇圓

ケインズ一般理論の研究

高橋 正雄 二五〇圓
ケインズ著「雇傭・利子及貨幣の一般理論」の批判的研究で、ケインズ經濟學を學ぼうとする方々に判り易く而も程度を下げずに解説

國民所得分析の原理

高橋 長太郎 五五〇圓
シヤウブ原著 永田清譯
内外税制や財務行政の實際面に通曉しているシヤウブ氏は、こゝに租稅政策や國民所得算定の問題に具體的な方向と方法を明示せらる

工業經濟概論

静田 均 二七〇圓
大島生諸君のため、特に戦後日本の新事態の考察に焦點をおき工業經濟の主要問題をその核心において究明せる一般にも向く好参考書

日本貿易論

松井 清 二八〇圓
明治初年から現在までの日本の貿易を史的に説明すると共に、貿易論の研究方法について著者の見解をも發表せられた特色ある述作。

アメリカ經濟史綜説

兒玉 洋一 四〇〇圓
アメリカ建國殖民地時代より現代迄のアメリカ經濟文化の解明に意を注ぎその經濟史的発展の系列に文化史的探究の麗筆を加えらる。

日本經濟史序説(古代)

野村兼太郎 二五〇圓
野村兼太郎 四〇〇圓

一般經濟史概論

A. アモン著 三二〇圓
山口忠夫譯 三二〇圓

理論經濟學の對象と概念

アフリクソン著 三八〇圓
松岡孝兒譯 三八〇圓

貨幣・物價・爲替論

佐波 宣平 二七〇圓
送料各三五圓

アダム・スミスと社會主義者

東京大學におけるアダム・スミスの會發會式講演速記

高橋 誠一郎

ただいま大河内さんから御紹介を受けました慶應義塾の高橋でございます。今お話のありましたように、當東京大學經濟學部に、アダム・スミスに關するまことに貴重な文献、彼の藏書の一部が所藏せられておりますことは、わが國におけるアダム・スミス研究の上に非常に大なる便宜を與えてくれるものと思つております。これは新渡戸先生がお買ひになつたといふことを伺つていたのであります。古い話になります。私はちよつと一九一二年、イギリスをたちまして日本に歸ります際に、新渡戸先生にお目にかかりまして、シベリア鐵道のある長い旅行を先生御夫婦と共にする仕合せを持つたのであります。車中、いろいろ經濟古文献の話が出ました際に、先生は、アメリカでアダム・スミスの『國富論』の初版を買おうと思つたが、どうも、高くて手が出なかつた、というふうなお話がありました。私はアメリカではどれくらいな値段を申しておりましたか、などということをお伺いしたのであります。が、當時、イギリスでは、『國富論』初版などを手に入れますことは、それほどの困難ではなかつたのであります。そのころはまだ新渡戸先生も、スミスに關する文献をあまり御所藏になつていなかったものであります。その後、御洋行になりました際に、ごういう大きな收穫を得られました。やがてこれがこの大學に納められることになりました。

アダム・スミスと社會主義者

一〇〇

町田義一郎著 銀行論 定價四五〇圓

鈴木諒一著 增訂 經濟統計論 定價三二〇圓
小高泰雄著 新訂 企業經理入門 定價二五〇圓
國弘員人著 經營分析 定價三五〇圓

新經營經濟學大系
小高泰雄著 經營經濟學總論 價四三〇圓
國弘員人著 增訂 企業形態論 價三三〇圓
森 五郎著 經營勞務管理論 價三五〇圓
山下勝治著 損益計算論 價三五〇圓
竹中龍雄著 國營企業論 價三〇〇圓

山本 登著 世界經濟論 價四五〇圓
白石 孝著 貿易政策要論 價二五〇圓
白石 孝著 國際貿易の基礎理論 價二五〇圓
日本貿易會編 貿易の基礎知識 價一九〇圓
毎日新聞社著 エコノミスト著 内外經濟問題の解説 價三〇〇圓
(送料各册三〇圓) 東京都千代田區神田 小川町三ノ一二 泉文堂

ことは、まことに喜びにたえない次第であります。

昔話ばかりいたすようでまことに恐縮でございますが、その後になりました一九二三年、すなわち大正十二年のこととあります。アダム・スミスの生誕二百年を記念する會を日本で催したい、これが方々の大學で計畫せられるようなことになりまして、日を同じうするので、いろいろ困難が生ずるであらうから、前もつて打合せて、日がかち合わないようにしようではないか、こういうお話に當大學の森莊三郎教授と、もう一方どなたでありましたか、慶應義塾にお見えくださいます、そうして日取の協定を行つたのであります。アダム・スミスは一七二三年の六月五日に生れたということに當時はなつていたのであります。その後、スコット氏の研究がออกมาして、六月五日というのは彼が洗禮を受けた月日であつて、生れた月日でないということが明らかになつたのであります。當時におきましては、まだ六月五日が彼の生誕の日と考えられていたのであります。そこで六月五日を慶應義塾の講演會の日といつたしまして、それより二日以前すなわち六月三日を當大學——當時の帝國大學——においての記念講演會の日というふうに定めたのであります。その日は、今日のようなうすら寒い日ではなく、非常に暑い日であつたことを想い出すのであります。都下の各大學から四人の講演者が選ばれて、スミスに關する記念講演を行つたのです。早稻田大學から鹽澤昌貞博士、東京商科大学から福田徳三博士、當東京大學、すなわち當時の東京帝國大學からは山崎覺次郎博士がお見えになり、それに慶應義塾から私が罷り出まして、おの／＼報告を行つたのであります。それから二日たちまして、また慶應義塾で同様の會が開かれたのであります。この際は當東京大學からは、どうしたわけでありますか、ついに講演者をお送りくださいませんでした。別段感情の行違ひがあつたのも何でもないと思つたのであります。いろいろな事情であつたかは、ただいまは記憶いたしておりませんが、講演者がお見えになりませんで、東京商科大学

からは三浦新七博士が見え、早稻田大學から猪俣津南雄教授が見えたのであります。慶應義塾からはやはり私に出るということと開會の辭を兼ねてお粗末な講演をいたしました。以上、合せて七人の講演者の中——と申しましたも、私はダブりますので六人になります。——私を除きましたは、いずれもみな故人となられまして、私一人が、依然學界の一隅に餘喘を保つてゐるという有様で、はなはだ心淋しい感じがいたすのであります。こんなことを申しまして、年寄りの感傷主義にひたりますことが實は目的でないものであります。こうしたことを述べましたことは、慶應義塾で講演會を開きます際に早稻田から猪俣氏がお見えくださるという知らせを受けて、慶應義塾ではいささか恐慌を來したということとを申し上げたのであります。猪俣氏は御承知の方もたくさんおられると思ひますが、當時においての最左翼の學者でありまして、最もつき進んだマルクス主義者であられたのであります。こういう思想傾向の方がアダム・スミス記念祭においでになりました。おそらくアダム・スミスをブルジョア經濟學の開祖として、ひどくこきおろされるのではあるまいか。どうも、アダム・スミスも生誕二百年に際してひどい攻撃を受けたということでは浮ばれないと思ひまして、われ／＼の間には、はなはだ恐慌を來しておつたのであります。ところが、實際、氏の講演を伺いますと、それはことごとくアダム・スミスの讚美であつたのであります。二つの會をあわせまして、七人の講演者の中で、これほどアダム・スミスを讚美せられた講演者は他に一人もおられなかつたのであります。御承知のごとく、マルクスはアダム・スミスに對しましてはなはだ殘酷な批評を下しています。たとえば『哲學の貧困』を讀みますと、こんなことを申してゐるのであります。ちやうどブルジョアその人が、實際上富を得るがために彼らを助けますプロレタリアの苦難に對して無關心であると同じように、その理論において、ブルジョアの生産方法の缺點と稱するところのものに對して無關心な宿命主義的經濟學者が存してゐる。この一團の中に

アダム・スミスがいるのである。古典的經濟學者と稱せられるものは、いずれもこの宿命主義者なのである。これとローマン主義者、この二つのものが彼のいわゆる宿命主義的經濟學者の中に入れられるわけでありませう。とういう立場から、おそらく猪俣氏もアダム・スミスを論ぜられることであろうと考えておりました。ところが先ほど申し上げましたように、氏の講演は徹頭徹尾アダム・スミスの讚美に終りまして、われ／＼は安堵の胸を撫でおろした次第であります。

それからしばらくたちますと、今度はアダム・スミスの『國富論』出版百五十年の記念講演會が行われました。こうした講演會は日本でも行われましたかどうか、兎に角、私どもは關係いたしませんでした。しかるに、アメリカでは、一九二六年の十二月から二七年の二月にわたりまして、シカゴ大學がこのスミス『國富論』の出版百五十年を記念する講演會を開催したのであります。そうしてこの講演の筆記——あるいは講演の草稿であるかもしれません——が、ひとまとめにその翌年に出版されることになりました。この中で、お読みになつた方もむろん多からうと思つておりますが、有名なポール・エッチ・ダグラスが、『スミスの價值及び分配理論』という講演を行つています。そうしてリカードオからマルクスに至ります社會主義者、すなわち後にリカードオ・ソーンシアリストと稱せられるに至りました人々を、リカードオ・ソーンシアリストと呼ぶことがはなはだ不適當である。これはむしろスミジアン・ソーンシアリストと呼ぶべきものであると、こうダグラスは説いたのであります。この理論がはたしてどこまで正しいのであるか。一體ただいま申したいわゆるリカードオ・ソーンシアリストと稱せられる人たち、すなわちトムソンであるとか、ホッジスキンのあるとか、グレイであるとかブレイであるとかいうような人々を、リカードオ經濟學によつて養われたものであると見るに至りましたのは、おそらくフォックスウェルの書きましたところの

ントン・メンガーの『勞働全收益權論』の英譯の序文、こちらあたりから出て來るものではないかと思われれるのであります。このアントン・メンガーのよく讀まれてゐる一八八六年の『勞働全收益權論』は、原書のドイツ語本で讀むよりは、一八九九年の英語本で讀んだ方がよいといふことがよく言われるのであります。これはどういふところから來るか、第一にはこの、タンナー譯についてフォックスウェルの序文がなかくいいのであります。メンガー以上の知識が示されている點がすいぶんあるのであります。それがために英語本で讀んだ方がかえつていいというやうなことが言われているのであります。この中で彼は特にリカードオと、ただいま申しましたトムソン、そのほかの社會主義者との間の關係を強調してゐるのです。續いてその後、一九一一年になりまして、ミス・ローエンタールという人の『ザ・リカードオ・ソーンシアリスツ』という著書が公にされたのです。これ以來、特にトムソン、ホッジスキンの、グレイ、ブレイといふような人々は、リカードオ社會學者として一般に知られるやうになつたのであります。ところが、ダグラスに言わせると、彼らのはたしてどこまでリカードオを讀み、リカードオを理解しており、またリカードオをもとにして彼らの社會主義理論を打立てたものであるかといふことは、まことにはつきりしてゐないのであります。見ようによりますと、いわゆるリカードオ社會主義者の中には、リカードオはほとんど讀んでいないとか、讀んでも何らの影響も受けなかつたと思われような人たちがいるのであります。しかしこれらの人たちはいずれもみなスミスを非常によく讀んでいたらしい。彼らは、みなスミスによつて示唆を受けることがはなはだ多い。かういふことを申してゐるのであります。その論據をいいたしますところは、およそ二つであります。第一に、スミスは、勞働は價值の原因であるといふことを申してゐるのであります。リカードオは單に、諸貨物は、その中にエンバディされましたところの勞働の相對量に比例して交換されるにすぎないのであると説いてゐるのでありますか

ら、リカードにおきましては、労働は價值の原因であるというよりも、むしろ物差である、尺度であるのであります。すなわち、リカードオとスミスの労働價值説の間には著しい違いがあるものと見なければならぬのでしよう。いわゆるリカード・ディアン・ソーシアリストは、このアダム・スミスの労働は價值の原因であるというところをとつて來るのでありますから、リカード・ディアン・ソーシアリストと稱するよりも、むしろ、スミジアン・ソーシアリストと稱すべきものであるというのが、彼の第一の論據とするところであります。第二の論據は、ただリカード・ディアン・ソーシアリストの中のホッジスキンのだけ直接にリカードオを研究しているのである。何と申しますか、ファースト・ハンドでリカードオを研究しているのである。ブレーは二、三リカードオを引用しているのですが、しかし、そのほかの者になりますと、ブレーの如きも恐らくはそうでしょうが、直接にリカードオにぶつかつてゐる者は少いのであります。リカードオの直接後継者でありますジェームズ・ミルであるとか、マカラックであるとかいろいろな人々を通じてのみリカードオを研究しているのである。しかしながら彼らはみんなスミスの方は讀んでゐる。このことは確かである。とういうような論據によりまして、リカード・ディアン・ソーシアリストはむしろスミジアン・ソーシアリストと稱せらるべきものであるという議論を立ててゐるのであります。

しかしながら、今日、十九世紀の社會主義學説の理論的創始者と稱せらるべきものはアダム・スミスであるというよりなことを申しましたならば、おそらくすべての人の中で、地下に眠つておりますアダム・スミスが一番びつくりして目をさますだらうと思われまゝ。自分はそんな危険な學説を創始した覺えはないというに違ひないのであります。けれども、ただいま申しましたように、スミスの學説が社會主義者に對して重要な影響を及ぼしましたことは、これを否認することができないのであります。労働全收益權論を主張する社會主義者たちが一番大きな示唆を受け

ておりますところのものは、アダム・スミスの有名な言葉からであることは否定出來ないところであります。すなわち資本の蓄積及び土地の領有に先だちます初期未開の社會状態にあつては、賃銀の高は労働の生産物によつて決定されるものであるという點であります。この言葉をアダム・スミスはくどいほど繰返してゐます。これは初版をとりつてごらんになりますと、彼が三箇所ほど立て続けにこの言葉を使つてゐることに氣付くのであります。いささか言葉は違つておりますが、大體同じような辭句を使つてゐます。土地の領有及び資本の蓄積の兩者に先だつ、事物の原始自然の状態にあつては、労働の全收益は労働者に屬する。かういふ言葉を使つてゐるのであります。初版の七十八ページ、七十九ページ、八十ページというところで、この言葉を繰返してゐるのであります。それから『國富論』の再版、すなわち一七七八年版によりまして、またさらに一つの辭句がつけ加えられることになりました。原始自然の状態においてはかくのごとくでありますが、資本の蓄積以後の状態においては労働の全收益は常に労働者に屬するものではないという文句が、七八年版で初めて挿入せられることになりました。そうしてさらに、ある國の土地がごとく私有財産となるようになりますと、地主はあらゆる他の人々と同じように、彼らが賤いたことのないところから刈りとることを欲しまして、その天産物に對してすらも地代を要求するのである。かう説いてゐるのであります。かくのごとく資本の蓄積及び土地の領有が行われますと同時に、利潤と地代とは労働の收益から控除されるに至るといふ所論からして、當然生ずべき結論は、労働全收益權の主張に存するがごとくであります。まことにまだ資本の蓄積も土地の領有も行われなかつた時代においては、労働の全收益は労働者に屬するのである。もしかくなごとき状態が續きましたならば、労働の賃銀は、分業によつてもたらされますその生産の諸力におけるすべての改良につれて増加すべきはずであつたのである。分業の結果として、二二が四にならずに、六になつたり八になつ

たりするでありました。二だけの能率をあげる人間が二人で協力する。そういたしますと、その結果として六の収益をあげることができるようになり、あるいは八の収益をあげることができるようになる。ところが、その増加したところの収益が労働者に歸することがない。やはり一人で働いていたと同じだけの賃銀を労働者に與えておいて、餘剰の収益はこれを資本家が持つて行つてしまふ。かのブルードン流の餘剰價值説がすぐにそこから生じて來るに思われるのでありますけれども、しかしアダム・スミスは、そのところまではついでに行かず終つたのであります。つまり原始状態におきましては、労働の収益は労働の自然的報酬、すなわち賃銀を構成しますから、そういうことになりそうなのであります。スミスはそのところまでは参りませんでした。かくのごとき原始的な時代は、一たび土地の領有と資本の蓄積とが誘入された後は、長く持續することができなかつたのであります。はたして労働がすべての價值を生ずるものであり、地代及び利潤が何ら具體的勤務を表示することなくして、これから擦除されたものにすぎないならば、労働は一切を收受すべきものであり、しかして賃銀は分配における唯一の配分ならざるを得ざるものであるという結論に到達しなければならぬように考えられるのであります。しかしながら、かくのごとき結論は、ついにアダム・スミスの念頭に浮ぶことなくして終つた観があるのであります。彼は最も顯著なる労働の生産力の増産をもつて、土地の領有及び資本の蓄積以後に行われたものであると見たのであります。そうして私有財産は、生産の増加と改良とによりまして正當視せられるのであります。つまり非社會主義的な、あるいは非社會主義的な議論に向つて進むことになつたのであります。

しかしながらスミスは、暗中模索的に後世の學説を豫示しておつたのであります。スミスにおいては、なほはだ矛盾が多い。矛盾が多いということが、すなわちスミスを研究する必要があるゆえんである。かようなことを申してい

る學者もあるのであります。後世のあらゆる學説というものは、大ざつぱに申しますならば、ことごとくアダム・スミスの中に含まれているとすら言うことができるのであります。たとえば今申しましたような點をとつてみますと、彼は賃銀學説上における収益率を豫示していると申さなければならぬのであります。これからしていわゆる殘餘収益説、あるいは殘餘請求權説とも稱せらるべきものが生ずることになるのであります。それからまた資本が蓄積せられました後においては、賃銀は、雇主と雇われる者、すなわち労働者との間の契約に基くものであるということ。スミスは諄々として説くのでありますから、やがてそこに契約説の基が開かれるのであります。そうしてこの労働契約に際しまして、あまねく一般の場合において有利の地位を占めますものは、雇主、すなわち力の強い者でありますから、雇われる者、いわゆる労働者は不利なる地位に陥らなければならぬ。かく説く點におきまして、彼は一種の勢力關係説、賃銀をもつて鬭争の結果であり、雇主及び労働者の契約締結上における強味に基くものであり、勢力關係によつて賃銀の高は定まるものであるという學説をとつていられるにも思われるのであります。それならば、雇主はなぜ、その優勝な地位を利用いたしまして、あくまでも労働者を搾取し、無限に賃銀を減少させることを敢てしないのであるかと申しますと、そこに一つの限界が存しているのであります。その限界は何であるかといへば、労働者の生産費である。労働者をつくる費用、すなわち労働者の生活費という限界がそこに存しているのである。かくのごとく説く點におきまして、彼はリカード的賃銀學説、すなわち最外限生存費賃銀學説、後の賃銀鐵則を豫示している感があるのであります。ですからラッサール流の賃銀鐵則などというものも、やはりアダム・スミスから生じていると言つてもいいと思つておられます。「労働者階級の狀態の改善について、諸君に云々するあらゆる者に對して、諸君はのつげに下のような質問をしなければならぬ。需要供給の支配する現在の狀態の下においては、労働平均賃銀

は常に一國民の生活の標準にしたがつて労働者の生命を維持し、その家族を永續させるに必要な純然たる生活費以上に多く出るものではない——平均労働賃銀は常に一國民にあつて生存の持続にとり、また、繁殖にとつて習慣的に必要な免れ難い生計に歸着するという冷酷な經濟法則、すなわち、賃銀鐵則を認めるかどうかと、先ず第一に問ひなさい。そして彼がこの學説を信じないとするならば、この男は諸君を欺瞞するものであるか、もしくは彼は經濟學の知識において最も悲しむべく幼稚であるかのいずれかであることを、最初から言わなければならぬのである。なぜならば、私が既に諸君に注意したように、自由學派そのものにおいても、この法則を否認する名聲のある經濟學者の一人も存しないからである。アダム・スミスもセイも、リカードもマルサスも、バスターアもジョン・スチュアート・ミルも等しくこれを認める點で一致しているのである。このラッサールはその『公開答狀』の中で叫んでいるのでありますが、しかし彼もやはり一番アダム・スミスの影響を多く受けて、かくのごとく言つていふように思われるのであります。もう少しほんとうにリカードオを研究いたしましたならば、あるいはそこにかんがりの相違が生ずるのではないか。こんなふうにも考えられるのであります。

そうして、このスミスの影響のもとに立ちましたところの社會主義的思想が、ただいま問題といたしましたところのいわゆるリカードイアン・ソーシアリスト以前におきまして、すでに生じておつたのであります。リカードイアン・ソーシアリストの著書は大分遅れているのでありまして、リカードオの『經濟原論』が現われた後において多く現われているのであります。一八二四年ごろからぼつ／＼だしているのでありますが、その以前一八〇五年において、すでに今日では有名になつていますところのチャールズ・ホール、この人の『ヨーロッパの諸國民に及ぼす文明の影響』と申しますか、これが現われているのでありまして、富の所有者は、労働の全收益の分配を支配するもので

あつて、彼らは獅子のわけ前を取得するものである。どう見ているのであります。貧民は單に餓死するか、隸屬するかを選択するにすぎないのでありますから、いわゆる労働契約の自由は虚偽であるというふうに申しているのであります。ホールは、労働が富の唯一の源泉であることを信じまして、地代及び利子が勞苦の報酬から不正に差引かれたものであると主張するのであります。人口の十分の八、すなわち、あらゆる富を生産する大多數は、その八分の一を收受するにもかかわらず、何ものも生産することのない十分の二は、生産せられた富の八分の七を收受するのである。言葉をかえて申しますならば、勞作者は八日のうちの七日を資本家のために労働し、残る一日を自分と妻子のために労働するのである。こんなことを申しているのであります。むろん彼もスミスによつて示唆せられるところが多かつたらうと思つたのであります。この書は御承知のアントン・メンガーによりまして、後の社會主義を豫示することの多いものであるということが強調されているのであります。むしろ強調し過ぎたくらいにメンガーは強調しているのです。しかしながら、こういつた思想は必ずしもアダム・スミスに始まるものではないこともまた注意を要するのでありまして、早く商業主義から工業主義に移ろうとした英國では十七世紀の後半におきまして表明せられたところの見解でありました。その脈を、ずつと後まで引いておつたものであると申して差支えないと思つたのであります。

餘談になりますが、ちようどアダム・スミスの生誕の年よりもさらに百年以前におきまして、カール・マルクスによつて近世經濟學の創設者と呼ばれておりますサー・ウィリアム・ペティが生れたのであります。でありますから、先ほど申し上げましたアダム・スミス生誕二百年を記念する會を開こうといはしました際に、この二人の記念會を一緒にやつたらどうだろうか、二百年祭と三百年祭を一緒にやつたらどうかという案を私は提唱したのであります。が、とう／＼排撃されてしまいました。アダム・スミスだけの會になつてしまつたのであります。ところで、この二

人の生誕が不思議な對照をなしていると言えは言えるのであります。アダム・スミスは、あれほど有名な人であるにかかわらず、何月何日に生れたかということがわかつていないのであります。すなわち先ほども申しましたように彼が洗禮を受けました日、すなわち一七二三年の六月五日に彼は誕生したものであるというふうに考えられておつたのであります。それならば、その日が洗禮を受けた日であるということがはつきりした後におきまして、生れた日はいつであるか——これもだんく調べられているようではありますが——まだ發見されたということをお聞きません。久しく西洋經濟學史界の消息を聞いておりませんから、あるいは發見されたかもしれないませんが、兎に角、最近まではその日がわかつていないのであります。生れてから洗禮を受けますまでに、相當の日數がたつていられるであろうということをお聞き申しているのではありませんが、どうもはつきりしたことは判つていないのです。ところがペチィの方にありますと、それより百年前に生れていられるにかかわらず、この方ははかに正確にわかり過ぎていたのであります。これはジョン・オブライというせんさく好きの人が申しているのではありませんが、ペチィの生れましたのは、一六二三年五月二十六日のツリニティ・サンデーの次の日曜日午後四時二十五分五十六秒ということになつていたのであります。何かの雑誌を讀んでいましたら、私がこのペチィ出生の分秒を發見したというようなことが書いてありまして、はなはだ恐縮してあります。この機會に申し上げておきますが、こんなことは西洋の本を讀みますといくらも書いてありますので、もとはオブライから出ているのであります。ただその受賣りをいたしましたために、何か私が發見したよになつて、はなはだ恐れ入つていたのであります。とにかくこれほどオブライはペチィの生年月日について正確に言つていたのであります。それでもあとから調べてみますと、ツリニティ・サンデーの次の日曜日というのは月曜日ではなかつたかというようなことを言つていられる人もありまして、まあこまかせんさくをするときりのないことになるのであります。

さて、閑話休題といたしまして、ペチィの名著『租税及び貢納論』とでも申しますが、『エ・ツリーチイス・オブ・タックス・アンド・コントリビューションズ』の現われしたのは一六六二年であります。その時代におきまして、大體労働をもつて富の源泉とするという考え方が一般に行われておつたらしいのであります。ペチィは「労働が富の父であり、發動的原質であることは、あだかも土地が母たるに等しい」ということをこの書の中で述べていますが、彼れがこれを大括弧の中に入れていられるところから、これは當時すでにもう格言になつておつたものではないかというように推定している人たちもおられるのであります。すなわち、十七世紀の括弧は、あだかも、引用符に同じものなのであります。

それは兎に角といたしまして、ペチィは外部的偶發的な價值高低の原因から内部的自然的なものを區別して労働價值説を提唱したのであります。いろいろな偶發的要素の作用があるにかかわらず、労働は依然として價值の眞源泉であり、尺度であります。ペチィは、後年のリカードオと同じように、地代を較差的利益に歸し、また、資本を過去の労働の結果であると推定して、労働價值説の基礎を置いたのであります。そうしてまた、かれは富と財産とが地主と怠情な者から、精練、勤勉な者に移らなければならぬと考へたのです。

それからただいま挙げましたところのリカードオ社會主義者は、いずれもみなリカードオよりもスミスによつて多く示唆を受けているとダグラスは申してあります。この點でいささか考へなければならぬことは、これらの人たちの中で、學說的に特に優れていますところのトムソン——サン・シモン學徒やブルードンやロードベルトスやカール・マルクスが、その主要な意見を彼の著作に負う所のあることが認められるに至りました。トムソンの學

説は、彼の主なる諸著書を通じて見ますと、アダム・スミスよりも、むしろ、ベンサムとオーエンを基礎にしておつたように思われることとあります。彼は概して、ベンサム流の功利主義の哲學を基礎にして議論を立てているようであり、たとえば、こゝに労働者をしてその生産力を發揮するを得せしめざるがために必要な資本の使用に對し、労働の産物の幾許が控除されるべきであるかの問題があります。斯くの如き價值に對して二個の尺度が現れます。つまり労働者流の尺度と資本家流の尺度のいずれによるべきであるか。こういう問題に當面いたしますと、彼はベンサム流の功利の理論に援を求めまして、資本家流の尺度を排斥し、労働者流の尺度によるべきことを主張するのである。こういうふうには彼は隨所に彼がベンサム流の功利主義者であつたことを示しているのであります。ところがホッジスキンのようになりますと、トムソンと異なりまして、ベンサムから離れて、ジョン・ロックに返り、功利主義を排して、自然法の教理に復したのであります。彼は熱烈なるスミスの讚美者でありまして、幾多の點で、彼の後繼者たちが、その根本觀念を狹隘ならしめたことを指摘しました。スミスは功利主義者よりもむしろ自然主義者と稱せらるべきものでありましょう。スミスに従いますれば、自然は各人を驅つて自己の地位を改善させる人間組織の原理によつて、社會的福利の爲めに備えたのであります。そうして、御承知の『目に見えぬ手』の假説のごときものが現われるのであります。リカードオになりますと、明らかにベンサムを根據といたしまして、功利主義哲學の基礎の上に立つのであります。ところがホッジスキンは、むしろスミス主義者であり、またロックの流れを傳えるものと見ることが出来ましょう。ロックは前に述べました價值の起原に關するベチイの見解を受け継ぎまして、人間はその労働を混入した所のものに對して自然の權利を有するとなすの意見を表明したのであります。スミスに見るような調和的仁惠的な自然的秩序は、リカードオになりますと、その半神祕的もしくは神性的性質を脱落して、功利的社會觀の合理主義に

合體されるようになりまして。リカードオになりますと、もう、獨斷的な『目に見えぬ手』の假説などというものは殆んど全く必要とされることがなくなつてしまひます。要求される總ては、普通の理性を有するものが、最小の投費をもつて最大の效果を得ようとする經濟的動機に従つて、その土地、労働もしくは資本を最も有利な用途に投入することとあります。往々にしてこの『目に見えぬ手』の假説は、古典經濟學につきまといつて考えられるのであります。これは正しい見解ではないように思われます。

それから利潤學説などになりますと、スミスの中には、やはり社會主義的經濟理論に根據を與えまする意見と、それから資本主義經濟學と申しますか、俗流經濟學と申しますか、これに根據を與える意見と、その二つのものが包含されているのであります。スミスにおきましては、地代學説においても同様のことが認められると思つてあります。つまり彼の資本利潤に關する學説で申しますならば——長いことは申し上げる必要もないので、どなたも御承知のことと思ひますから、ただ一言だけ述べさせていただきますならば——一面におきまして彼は、資本の利潤をもつて労働の收益から資本家が自分のために控除したところのものであつて、これがために、勞作者に彼によつて創造される全價值を收受することがなく、資本家とこれをわかつかつてやむなきに至らしめるのであると見ていたのであります。この點を進めて行かば、つまり社會主義的理論に向つて進んで行かなければならぬと思はれるのであります。しかしながら、彼はまた他方におきまして、資本利潤の源泉をもつて、労働の創造したところの價值以上に、産物に對して與えられたところの増加價值である、というふうに説いてるのであります。アダム・スミスは、その資本利潤理論におきまして、全然中立の地位に立つていたものと言ふことができると思つております。すなわち、スミス時代においては、また社會情勢が中立的な議論を許す状態にあつたのであります。

アダム・スミスは工業主義的經濟學者であるというようなことがよく申されるのであります。スミスは、マーカントリストの商業主義、フィジオクラートの農業主義に對して、工業主義の經濟學說を提唱したものであるというようなことをよく言われているのであります。彼をもつて工業主義的な經濟學者と稱し得べくんば、家内工業の理論家であつたとか、または、カール・マルクス流の言葉で申しますならば、「マヌファクチャー時代の總括的經濟學者」であつたとか言わなければならぬのであります。ほんとうに機械工場制度工業の理論家とは言ふことができないのです。アダム・スミスの見ました産業革命の世界はまだ若かつたのであります。アダム・スミスが『國富論』の筆を運んでいたところに、すでに産業革命は開始せられていたのであります。しかし、まだその影響は十分に現われていなかつたのでありますから、スミスほどの經濟學者といえども、産業革命の結果が労働階級の上にいかなる影響を及ぼすものであるかということをつかむことができなかったのであります。産業革命を徴示するところの最大の工業であります。綿工業のごときものは『國富論』全巻を通じてわずかに一度、それも偶發的に舉示されているにすぎないのであります。それから産業革命の最も大きな原動力となりましたジェームズ・ワットの蒸氣機關の如きも、『國富論』中には現われておらぬのであります。ワットとアダム・スミスの間には密接な個人的な關係があつたということが傳えられているのであります。スミスはロンドンからグラスゴオに移つて來た二十歳の若いワットを横暴なギルドの壓迫から救つてやつたというような話が傳つており、ワットはスミスに對して感謝するところがなほだ多かつたと言われているのであります。しかしながら、ワットの蒸氣機關が特許を得ましてから僅かに七年しか経つていない頃に『國富論』は出版されたのであります。でんで蒸氣機關という言葉は『國富論』の中には現われていないのであります。ステイム・エンジンというような言葉は現われないうで、たゞ、ファイア・エンジンという

ような言葉が使われていたに過ぎないのであります。そうしてその當時のファイア・エンジン、すなわち蒸氣機關は、ニューコメン式の蒸氣機關であります。ジェームズ・ワットの蒸氣機關はまだこの名著の中には現れてこない。こういう状態にあつたのでありますから、資本と労働の對立が、リカードの時代ほどはつきりしてはいないのであります。そこで彼のような中立的な見解を表明することができたのであります。その後における資本の發達、勞資の對立並びに階級の分裂はやがて中立をして不可能ならしめまして、やがて一方におきましては、利潤學說としては直接及び間接の生産力說、制欲說並びに資本家勞働說というやうなものが起りますと同時に、他方におきましては社會主義者流の搾取說が生れることになるのであります。スミスはその前途を見越すことができませんで、中立的な學說を表明しておつたのであります。

地代學說につきましても彼は、一方では、土地所有者の利益が社會の一般的利益と不可分的に結合するとなし、他方では地代をもつて、利潤と同じく、労働の全収益からの控除額であつて、これに對立する何等の寄與も行われることのないものとなしています。一方は、彼が重農學派から受けて、マルサスに傳えるに至つた所のものであり、他方は後世の社會主義的理論に對して導火線となつた所のものであります。

一體、スミスの時代は、一般に、いわゆる共產主義的あるいは社會主義的な議論のはなはだ下火になつた時代ではなかつたでしょうか。かれの時代はごく散文的な時代でありまして、詩趣なき光彩なき時代であつたように思われるのであります。まあ美術などの方から申しましても、十八世紀の美術と申しますと、註文主や購買者の虚榮心や無知に弄ばれた低俗卑近なもの、藝術味の少いものが、——これはむろん一概には申されないのであります。——どうも多かつたように思われます。イギリスにおきましては、早くから一種の共產主義的な意見が行われておつたのであり

ますが、たんに一個の國民に對してだけでなく全世界に對して完全な政治の典型を示し、もつと平等でもつと良好な富の分配を行おうとする計畫がマルサスの先驅をなすロバート・ワルレスなどによりまして、人口原理をもつて對抗せしめられ、人口は不平等が再現し、困苦が再襲するまで増加す可きであるという意見が表明された時代であつたのであります。

英國の思想史上におきまして、早く共產主義的な含蓄を持つところの意見が顯著な役割を演じました最初の大危機は、一三八一年の農民一揆ではなかつたでしょうか。この年の五月の末日の聖靈降臨祭に勃發いたしましたところの大農民一揆に際しまして、宗教改革の曉星と稱せられておりますところのウィクリッフの教徒は、天の下の一切諸物が共同に所有せらるべきことをプラトンによつて説き、セネカによつて證明したのであります。ウィクリッフは、一方においては中央集權的な國家を法王の支配權から解放しますとともに、他方におきましては封建的な貴族と教會の劫掠に對しまして、村落協同體を擁護しようとしたのであります。そこで彼は、王政とともに共產主義を強調するのであります。自己の權威をもつて小農協同體を保護する善良なる國王は、すなわち彼の理想であつたのであります。彼は聖アウグスティヌス及び一般諸教父と同様に、人間の墮落によつて國家というものが設立されることが必要となつたのであると説くものであります。國家というものは、要するに原罪のけがれを有するところのものである。原罪のけがれ、アダム墮落のけがれを持つたところのものであります。國王というものはアダムの正統を傳えて君臨するものであるという考え方が、いつまでも存しておつたのであります。そのアダムが、すでは原罪を犯しているのでありますから、アダムの正統を傳えて君臨する君主政治も、また原罪のけがれを持つているものと申さなければなりません。この君主政治が共產主義と結合して、農民の共產主義的團體を貴族や僧侶の侵害から保護し得た場

合において初めて清淨なものとなることが出来たのであります。自然的見地から見ても正當であり得るのであります。こんなふうに説いていたのであります。しかし、彼の教理は、共產主義實現の手段として一切の暴動及び叛亂を排除するものであります。何ら直接の援助を農民一揆に與えるものではなかつたのであります。ところが、大體においてそうした教理を奉じて立つたものは、實際において暴力に訴えてしまつていたのであります。この一揆におきまして、指導者の地位に立ちましたところのものはマッド・ブリスト、狂僧と呼ばれたジョン・ポールであつたのであります。ジョン・ポールは、「この世には一人の奴隷もなく、萬人はことごとく平等に創造された。人に對する人の隷屬は神の意思に反するものである」と叫びます。彼の説教は、要するにただこの一語に盡きると言われています。「アダムは掘り、イブは紡いだ時、何人がジェントルマンであつたか」という連句を引用しまして、この時代の社會的不平等を力強く説いたのであります。人民は壓倒者を排除しなければならぬと絶叫したのであります。そうした農民はカンタベリー大僧正の獄舎を破りまして、ここに幽閉されておつたポールを放つて、これを陣頭に立てて、三萬人がワット・タイラーの指揮のもとにロンドンに向つて進むという大騒ぎがもちあがつたのであります。當時におきましては、一種の共產主義的議論が相當勢力を占めておつたことが窺えるのであります。それからその後におきましてジャック・ケイド、これを首魁とするところの一四五〇年五月、六月におけるケント人の一揆が起るのであります。そこであるのシェークスピアの御承知の『ヘンリー六世』の第二部に現われているように、ケイドがこう申しているのであります。ケイドがほんとうにこう言つたものであるか、あるいは作者の想像によつたものであるかはわかりませんが、「この國の記録はみんな焼き捨ててしまえ。これからは私の口がイギリスの國會だぞ。」として、「今後は、す

べてのものは共有だぞ」。こういう宣言を出しているのであります。そんなふうにしたしまして、早くから英國では共産主義的な思想が行われておりましたが、やがて一五二六年になりました、有名なトマス・モアの『ユトピア』が現われるのであります。

ところがその後になりますと、二流れのユトピア思想が闘争のであります。十七世紀の英國におきましては、財産法や社會制度の改革を行つて、人間究竟の再生と成全とを求めますよりも、むしろ生産的技術と應用科學の進歩によりまして、理想的な國家に向つて進んで行くことができる。こういう考えの方が強く民心をとらえるようになつたように考えられるのであります。すなわちこれがフランス・ベーコン流のユトピアであります。ちょうど時代は同じであります、國力が疲弊してしましたイタリヤにおきましては、カンパネラを描いていますような、まことに陰慘たるユトピアが現れたのであります、英國におきましては、ベーコン流のまことに華やかな應用科學の多様な作用と生産力の異常な發達によりまして理想的な社會がこの世に打ち建てられるという意見が勝利を占めるのであります。

ドイツでも、農民一揆の際には、トーマス・ミュンツァーのような傳道家は、社會は共産主義的基礎の上に改造されなければならぬものであつて、その典型となるべきものは原始的キリスト教會でなければならぬと叫んでいるのであります。治める者も治められる者も、富める者も貧しき者も、存すべきではないのであります。彼は富める者、力強き者の罪を鳴らして彼の福音を拒んだすべての者の死を要求するのであります。しかし、當時その勢力の絶頂にあつたマルティン・ルッターをもつて、見ますれば、かくのごときはキリスト教的な自由を全然物質的意義に解釋するものであります。彼は宗教の名において蜂起するは許すべからざることであるとなし、そして庶民の隸屬をもつ

て神聖であるというふうに宣言するのであります。それからメラニヒトンになりますと、所有權は神權によつて存在するものである。こんなふうに説いておられますし、またジュネーヴの宗教改革家ジャン・カルヴァンになりますと、さらに私有權擁護の歩を進めるのであります。やがて、新教ことにカルヴァン教は新興ブルジュワヰにその職業の誇りを注入し、商業的精神の自由行動と資本主義的産業組織に對してキリスト教的裁可を與えることとなるのであります。そしてまた、英國では、たゞいま申しましたフランス・ベーコン流のユトピア、すなわち『ノヴァ・アトランティス』が現われまして、人類の幸福を社會改良や、宗教的倫理などには求めませんで、應用化學と生産技術とに期待することとなつたのであります。こういったようなユトピア思想が優勝な地位に立つに至りまして、十八世紀になりまして、理想社會は富の共有の上に建設せられないで、むしろ、知識の共有の上に樹立てらるべきものであるというベーコン流の考え方が、ずつと支配的な地位に立つていたように考えられるのであります。そして、これがアダム・スミスに脈を引くのであります。むしろ當時におきまして、共産主義的な意見を主張する者があつたのであります、それらのものは人口原理によつて打破することができるというふうに考へていたものが存しておつたのであります。さきに一言しました一七六一年に出ましたところのロバート・ウォレスの著は、後のウィリアム・ゴッドウィンに對してトマス・ロバート・マルサスが説いていると同じようなことを申しているのであります。理想的な社會、完全な統治の下におきましては、一切のものは人口を大ならしめるに好都合となり、結局、後世のいわゆる人口原理の作用によつて、ただちに破壊されてしまわなければならぬのである。こういった意見を表明しているのであります。

アダム・スミスは、労働無産階級に對してすこぶる深い同情を有していた。自然權の教理に親しんだ大多數の哲學

者と同じように、彼は労働者の要求に對して大なる好意を持つていました。そういう點を見ますと、スミスは社會主義者からの非難を免れ得ることになるのであります。しかし、それならば今日の社會制度を破壊して、社會主義的な、あるいは共產主義的な社會を樹立しようとしたかと申しますと、彼は單にエリザベス女王朝の徒弟條例を攻撃するとか、人民の物質的福利に立脚して「低賃銀の經濟」を主張するものに反對したりするにとどまりまして、それ以上の發展を來たさしめようとはしないのであります。つまり理想的社會に入るの門戸は永く人間の前に閉ざされてしまつたのであります。今日の狀態というものが是認されることになるのであります。これは、一つはあるがままの狀態を承認する蘇國人氣質からであると言ふこともできるのであります。ことにまた、富の増加の大であつた英國において、こういつた考え方が強く作用しておつたがためでもありません。スミスは、世界の歴史をもつて労働率増加の歴史であるといふふうに見ていたのであります。そして最も顯著な労働の生産力増加は、土地の所有及び資本の蓄積以後に行われたところのものであります。死せる過去にさかのぼつて考究する必要はないのである。地主と産業的及び商業的資本家とは彼の生存した社會において事實支配的な地位に立つておつたのであります。そして彼は彼らを自然的秩序の一部として承認したのであります。彼はありのままの狀態を承認する、その冷靜なスコットランド人的態度を持つていたのであります。スコットランド人にはどうもそういうところがあつたようであり、ます。彼はあるがままの狀態を承認するといふ、すこぶる冷靜な態度を持つておりました。スミスは彼の想像したような原始的社會におけるごとく、利潤及び利子は消滅して、勞作者がその労働の全収益を享有すべき經濟社會の創立が、はたして可能であるかどうか。そういうことを研究しようとするがごときことは斷じてなかつたのであります。すなわち、エデンの樂園の門扉は長く人間の前に閉ざれまして、彼が再びその中にいるの可能性は、全然存することがないといふことになるのであります。

この當時は、感傷主義センチメンタリズムの時代とも言われているのであります。しかし同じく十八世紀のセンチメンタリズムでも、フランスとイギリスとでは著しい相違があつたといふことを申しているレスリー・スチーブンのような學者もあるのであります。フランス大革命とその恐怖主義とは、ある程度まで、敏感な心情の諸衝動に大きな重要性を與えたルソーらの哲學の結果と見なされていますが、ルソーがその著作の中に現われますところの女主人公の悲哀の上に惜氣もなく——あまりに惜氣もなく、その涙を注いだ時、その女性をその時代の女性の典型的なものとなすのであります。特殊な婦人ではなくして、それは當時の婦人の典型であるとみなすのであります。そして彼は意識的に、社會的及び倫理的革命を企圖しつゝあつたのであります。かくのごとき悲惨な境遇に婦人というものはあるのでありますから、社會的な倫理的な革命を起して婦人を救わなければならぬ。社會を改めなければならぬ。こういうふうにか考へるのであります。ところが英國の方では、たとえばローレンス・スターンのごとき作家——これは有名な「ザ・センチメンタル・ジャーニー・スルー・フランス・アンド・イタリア」、まあ感傷旅行記とでも申しますか、そういうものを書いてる作家であります。これになりますと、變化に對する何らの欲求をも示すことなくして、ただ涙を流すことに満足してゐるのであります。悲惨な狀態に對して涙は流すのでありますけれども、そうかといつて、それならば、公共の利益のために社會改革を行おうとするかと申しますと、そんなところは全然ないのであります。ただ泣いておりさえすれば、それでいいのであります。物ごとはそのあるがままがいいのである。むしろ涙を流す種がなくなつてしまひましたならば、それは、かえつて悲しいことでしょう。同じく牢屋に入つてゐる囚人の上に涙を落しにしても、フランス人のようにバステイユの牢獄を破壊するといふことにはならないのであります。英國人の

方は、これをただそのままに見ている。ゴールド・スマスなんかになりました。富が蓄積され、人間が廢頽する有様を慨歎してはおります。が、少くも、美しい田園の野趣を喜びはしても、自然的状態の復活を見ようとするが如きことのない善良な保守主義者なのであります。これ等の文學者は、ちよろどスマスと同じく十八世紀に生存していた人たちであります。やはりこういった考え方がアダム・スマスにも存していたのではないのでしょうか。勞働無産階級に對して同情は寄せますが、しかしながら、生産の増加によりまして、この世の中はやがて救われるであろう。何も遠い過去にさかのぼつて、死んだ原始社會を今の世に復活させる必要はないのである。現在のあるがままの状態に満足して行こう。こういった安易な考え方がアダム・スマスには存していたのではなからうか。こんなようなことを考えまして、つまらない講演をいたした次第でございます。

どうも長い間、お粗末な講演を御清聴くださいました。まことにありがとうございます。

「社會保障制度に關する勸告」の成立

園 乾 治

一 「社會保障制度調査會」の答申

社會保障という言葉が何日頃から使用せられるようになったか詳かでないが、一定の意義をもつ現代の用語として使用せられるようになったのはそんなに遠い昔のことではない。恐らく一九三五年のアメリカに於ける立法に由來し、一九四八年のイギリスの制度によつて劃期的意義をもつに至つたものであらう。勿論、これ等の國々に於てそれぞれ右の立法または施行に先立つて、これが立案のための委員會などで社會保障という言葉が使用せられているが、世間の注意を惹くに至つたのは、少くとも前に述べた年代以後の事に屬するといつてよいであらう。

しかし社會保障という言葉のもつ内容は未だ決して明確ではない。それはアメリカ及びイギリスに於ける制度の内容を検討すれば判るように、アメリカの制度に於ては被用者に對する一部の社會保險と社會事業とを含むものと解せられ、イギリスの制度に於ては單に被用者のみを對象とせず廣く一般國民を對象とし、社會保險と社會事業、醫療制度をも含むものと解せられている。一九四九年に於て社會保障制度を實施している國々の數は、アメリカ連邦社會保障局の調査したところによると五十八カ國に達するが、それ等の國々に於ける制度はいわば千差萬別の有様である。加之、爾來専ら社會保險として理解せられたものを社會保障の一部門とみて、社會保險という代りに社會保障という